
朝焼けが消える前に

綾里 美琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朝焼けが消える前に

【Nコード】

N2063Y

【作者名】

綾里 美琴

【あらすじ】

態度の悪い勇者らしからぬ勇者、滅多に喋らないが性根の優しい魔法使い、ムードメーカーの司祭、旅をするきっかけを作った清純な神子。四人は勇者一行として世界を救うべく魔王との戦いに挑む。そんな彼らが旅をしていた頃の、日常の話。（明けない夜の始まりの過去の話です。サイトからの転載）

この世界には魔王がいる。魔王を倒すべき存在として勇者がいる。そして勇者を導く神子がいる。

お伽話でもなんでも無い、子供ですら知っている当たり前の現実。だがそれが誰かの手によって作られた関係だと知る者は、いない。

「あーくそ、あつちい！ オイ、魔法で氷出せ氷」

「すぐ溶ける」

「冷静に返すなよ……っ！ かお前、暑くねえのか？」

「ん……暑い」

やっぱり暑いんじゃないか、と勇者が口を開こうとすると、その前に魔法使いは大きな音を立てて倒れこむ。衝撃で辺りの砂が舞い散った。

「オイ！？」

「あちゃあ、やっぱり真つ黒のローブで砂漠超えは無理があつたよね。だから止めたのにー」

「オイコラそのアホ司祭、お前は楽しそうに眺めてんじゃないよ！ オアシスまでコイツを運べ」

「ええー、ぼくの細腕でこんな大男を運ぶの？」

「殴り司祭のどこが細腕だよ、ドアホ。俺でもいいが、魔族が出てきた時にお前とシアだけで対処出来るのか？」

「むむ……」

「私からもお願いします。彼を運んでもらえませんか？」

「きみからの頼みなら喜んで！」

「テメエはシアと俺らへの態度が違いすぎんだろー！」

ここにいるのは、紛れもない勇者一行だった。勇者に神子、仲間として魔法使いと司祭。王道一直線のパーティーメンバーでありながらも実に個性豊かな面々は——そう表現したのは司祭だ——今日もまた数々の事件を起こしながら旅を続ける。未来を掴み取るために、明日をまた四人で迎えるために。

＊＊

「うあー重かったあ。魔法使いが一番体格いいっておかしくない？
ねえおかしくない？」

「ならお前も鍛えればいいだろうが。ああ……無理か」

「身長比べながら鼻で笑うのやめてくれないかなあ！ 本人にはどうしようもない部分を馬鹿にするなんてサイテーだよ！ 勇者様がそんな人だなんて思いませんでした……って女の子に幻滅されちゃうよ！」

「すげえどうでもいい」

「余裕の発言がむかつくなー！ 勇者っただけでモテるなんてずるいよね、中身はこれなのにさあ」

むかつく、とは言いつつも、さほどそうは思っていないだろう軽い口調で喋り続けるのは、神子の幼馴染である司祭。元々は良いところのお坊ちゃんらしいのだが、神子を守るために家名を捨てる覚悟で神に仕える道を選んだという。そんな彼に本当に信仰心があるのかは微妙なところではあるが、口の上手さで町の人々の心を掴んでいるようだった。そのためか、この旅においてもムードメーカーの役割を担っている。稀に口が過ぎる場面もあるが。

「腕、大丈夫ですか？ 水を汲んできましたので……よかつたらどうぞ」

「ありがとう、メシア！ きみは本当に優しいね！」

「いえそんな、誰でも出来ることですよ。勇者様も、どうぞ」
「ああ、わりいな」

二人に水筒を差し出すのは、旅をするきっかけを作った神子——
「メシア。救世主という意味を持つメシアは彼女の本名ではないよ
うだが、もう呼ばれ慣れてしまったらしく、仲間達もそう呼んでい
る。唯一、勇者だけは「シア」と愛称で呼ぶけれど。

性格は非常に穏やかで健気、慈悲深くもあり、まさに絵に描いたよ
うな「聖女」だが、司祭のラブコールを笑顔であっさり流して彼の
反応を見て遊んだりと（当然ながら故意である）人間味らしさも持
ち合わせている少女だった。でなければきっと好意は抱けなかった
だろうな、と勇者は常々思っている。

「？ 勇者様、どうかしましたか？」
「なんでもねえよ」

純粹無垢な聖女なんてうさくさいだけだしな。そう感じる程度に
は、勇者は捻くれていた。彼は元々は荒くれ者の傭兵で、本来なら
とてもではないが勇者の器ではないのは本人も自覚しているところ
だった。傭兵仲間には「似合わねー！！」と大爆笑された程である。
笑った連中はしっかりと殴っておいたが。

「メシアの顔を見つめちゃって、あやしーのー！ あ、実はメシア
のこと好きだったり？ だめだよ、いくら勇者様でも渡さないよ！」
「ねえな、おもいきりタイプじゃねえ」

「ああ、きみの好みって自信満々でばんきゅっぽんっ！ の大人の
おねーさんだよ。んであんま趣味良くない！」

「うつせえな。ああいう女の方が楽なんだよ……っってお前、シアの
前でこういう話させんな」

「不潔です、勇者様……！！」

「やーい、不潔不潔ー！　言われてやんのー！」

「うつせえよ、シアもお前わざとだろうが！」

「……賑やかだな？」

不意に加わった声に、三人は揃って目線を落とす。声の主は、日陰で横になっていた魔法使いだった。彼はけだるそうに髪を掻きあげながら、そっと上半身を起こす。

「あー目が覚めた？　きみ砂漠のど真ん中で倒れたんだよ、覚えてる？」

「なんとなくは」

「ぼくに感謝してよね。きみをここまで運んだのぼくなんだから！」

「最後の方は遠慮なしに引きずってただろうが、いばんな」

「引きずって……ましたね」

「し、仕方ないじゃん！　きみはもうちょっとダイエットしなよね！」

「すまない。助かった」

あまりにも素直にお礼を言われるものだから、司祭もそれ以上は責められずに口を噤む。魔法使いである彼は口数が多くなく、必要最低限しか喋らないが、性格に問題があるわけではないのだ。

「ご気分はいかがですか？　お水、飲めます？」

「ああ。君もちゃんと飲んだのか？」

「はい、頂きました」

「ならもらおう。ありがとう」

「いえ、お気になさらないでください」

まず先に少女の心配をする辺りからも、彼の優しさが窺える。彼は生まれてすぐに母親に捨てられ、父親の行方もわからず、隣に住ん

でいた心優しい老婆に育てられたのだという。老婆は彼を愛し、彼もまた老婆を愛したが、子供心ながらに申し訳なくて上手く喋れなかった、といつか語っていたのを勇者はよく覚えていた。

そんな風に、四人は育った環境もそこから生まれる価値観も大きく異なっている。そのため最初の頃は幾度となく衝突したし、命を預けるなんて絶対に無理だとすら思った。だが四人は思想こそ違えど「魔王を倒して世界を平和にする」という志を共にし、そうして戦い続けるうちに揺るぎない絆を築き上げたのである。

かけがえのない戦友——誰もそう言葉にしたりはしないが、誰もがそう思っているのは皆分かっていた。そして、それが誇りでもあった。

＊＊

ぱちぱちと音を立てて、薪が燃え続ける。勇者は何をするでもなくただじっと眺めていた。傍らには、彼の愛剣が無造作に置かれている。

普段は特別難しい事を考えていない彼だが——頭脳戦は他の仲間の仕事だ——この時間だけは様々な思いを巡らせる。仲間と出会う前の事、出会ってから的事、これから先の事……ほんの少しの寂しさと不安、後悔を織り交ぜながら、それでも彼は己と向き合う。逃げるつもりはなかった、そうしたところで逃げ切れるはずもないのだから。

「ゆづしや、さま……？」

柔らかなソプラノの声が、たどたどしく彼を呼ぶ。この少女は自分がメシアと呼ばれているためか、勇者の事も常に「勇者様」と呼ぶのである。そのせいで仲間達も面白がって真似するものだから、そ

れはやめると抵抗はしたものの一向に直らず、最近では彼もすっかり諦めてしまっていた。

「わりい、起こしたか」

「あ、いえ……火の番、代わります」

「アホか、女にさせる気はねえよ。いいから寝てろ」

「ですが……」

「俺はお前よりは旅慣れてるしな。寒くはねえか？」

「平気です。このローブ、あったかいから」

「それはそれでどうかと思うんだが……そんなもん着てつから倒れるんだろ、アイツは」

勇者は呆れたように言いながら、何もかけずに横になっている魔法使いに視線を移す。司祭といい彼といい、フェミニストな二人である。

「ふふ、ほんとうですね。でもこのローブは特殊な絹で作ったもので、魔法抵抗を高める効果があるんだそうですよ」

「へえ、そんな上等なもんだったのか。コイツの趣味かと思ってたぜ」

「ひよつとしたら、それもあるかもしれませんね」

彼女はおかしそうに、くすくすと笑う。寝ている二人を起こさないようにと、控えめなものではあったけれど。

「明日も早い。もう寝ろ」

「お話してたら目が覚めちゃいました。それにもうちよつとだけ……勇者様とお話してたいです」

「俺のせいだよ……倒れても庇わねえからな」

「はい、かまいません。足手まといになるつもりはありませんから」

きっぱりと言い切る彼女からは、並々ならぬ意思の強さを感じる。男三人に混じって救済の旅をしている彼女は、決してただ守られるだけの女ではない。聖術と投げナイフを駆使し、積極的に戦闘に加わる勇ましい女だ。そんなところは、勇者も純粹に評価していた。

「あの……勇者様」

「どうかしたか？」

「いえ、あの……少しだけ、そちらに寄ってもいいですか？」

「好きにしろ」

勇者が了承すると、彼女は勇者との距離を縮める。その時、彼女の長い髪がさらりと風に流れた。

「神子、ねえ」

「え？ あ……」

露になるのは、彼女の額に浮かび上がっている聖なる紋章。それこそがまさに彼女が神子たる所以であり、生まれながらにして宿していたのだという。そのため彼女は幼少の頃から崇められ、また彼女も人々の期待に答えるべく様々な知識を学んだそうだ。そして彼女が五歳の時に神の信託を受けた事で、神子としての地位を確固たるものにした……らしい。本人がそう語ったわけではなく、周囲の人間の噂話から得た知識に過ぎないため、どこまで真実なのかは分からないが。

この世界に生を受けた瞬間から人生の道筋を決められているというのは、一体どんな気分なのだろうか。勇者は何度かそう考えて、しかしすぐに飲み込んできた。いくらなんでも無神経すぎるし、そこまで他人に踏み込むつもりもないからだ。

「……きつと、もうすぐですね」
「ん？」

考え込んでいた時に予想外の返答をされ、勇者は思わず聞き返す。
だが、彼女の言いたい内容はすぐに思い当たった。

「勇者一行が魔王を倒してハッピーエンドまで秒読み、ってか？
ま、俺は今までの生活に戻るだけだろうが」

「傭兵に戻られるのですか？ 世界を救った勇者様ならそうしなくても充分暮らしていけそうですけれど……」

「金もいるしな。それにそっちの方が俺の性に合ってる。英雄だのなんだのと国に縛られるのはめんどくせえんだよ」

「妹さんのため、でしょうか。勇者様は妹さん想いですね」

「別にそんなんじゃないよ。ただ……まあそうだな、たった一人の肉親だ、そりゃかわいいさ」

彼は幼い頃に両親と死に別れ、それからはずっと妹と二人で暮らしてきた。しかし妹は数年前に落下事故に巻き込まれ、以来ずっと眠り続けている。口が悪ければ態度もよろしくない彼が勇者として今回の旅に加わったのは、つまるところ妹のためだった。

妹が目覚めたとき、平和な世界であってほしい。全人類の希望を託された勇者の願いは、たったそれだけのシンプルなものだ。

「素敵ですね。私は兄妹がいまさんから……ちょっとだけ羨ましいです」

「そういうもんか？ ああじゃあ、この旅が終わったらアイツに会ってやってくれ」

「え？」

「明るいつーか賑やかな奴でな、人と話するのが好きだったんだ。きつと喜ぶ」

彼女は一瞬だけ驚いた顔をして、次には本当に幸せそうに微笑んだ。

「是非お会いしたいです。その時は、皆で伺いますね」

「あ？ コイツらも来んのか……ぎゃあぎゃあとうるさそうだな」

「ふふ、言葉とは裏腹に嬉しそうな顔してますよ。じゃあ、はい」
「……なんだ、その手は」

彼女はにこにこ笑いながら、小指を立てた右手を勇者に向ける。

「指切り、です。東の国で約束の証として行われるものなのですが……ご存知ありませんか？」

「知らねえな」

「こうするんです、ほら」

彼女は勇者の手を取り、小指と小指を絡ませる。そして不思議な呪文を唱えながら、軽く上下に振った。

「ゆびきりげんまん、嘘ついたらホーリーレイン千本ふーらす、ゆびきったつ」

「ああ！？ なんだそりゃ」

「いやだつたら、約束、守ってくださいね？」

茶目つ氣たつぷりに笑う彼女はどこにでもいる普通の子どものように、勇者は頭をぼりぼりと掻きながら「……しゃーねえな」と渋々承諾する。すると、彼女は益々笑みを深くした。

穏やかな空気が、二人の間に流れる。まるで恋人同士のように、仲の良い兄妹のように、或いはその両方かのように。

神子は勇者の顔をじっと見つめ、何かを言おうと口を開きかける。

しかし、仲間によつてそれは叶わなかった。

「な〜に甘酸っぱい青春のページみたいなやり取りしてるのー。
だめだよメシア、こんなろくでなしといたらばくつと食われちゃう
よあ」

「……品がない」

「ああ！？ オイお前ら、いつから起きてた！」

「ぼくらだって勇者の連れなんだよー？ 傍であんだけ長いこと話
してて気付かないわけないじゃん」

「その通りだ」

「寝たフリかよ…… よつぽどお前らの方が悪趣味じゃねえか」

「それでメシアを守るならいいもーん。ほら、おにーさんの方お
いで？」

司祭は右手で手招きし、神子を呼ぶ。しかし彼女は立ち上がると、
楽しそうに魔法使いの横に腰を下ろした。

「ええええ、そうくるの！？」

「はっ、フラれたな」

「だーから鼻で笑うのやめてよね！ なんだよ、きみなんてちょ
つと強いだけじゃん！ かわいさが足りないんだよ、かわいさが！」
「男にんなもん必要ねえよ」

「わかつてないなー、最近はかわいい系が流行なんだよー！」

「激しくどうでもいい。っーかお前らは寝ろよさつさと」

「やだ、二人の邪魔する。あ、そうだこの際みんな起きてるって
のはどう！？」

「あ、それいいですねー！」

「面白そうだ」

「ガキかよお前らは……」

勇者はぐったりと肩を落としつつも、その顔はまんざらでもなさそうだった。そんな彼を見た他の三人からは、笑みが零れる。こうして四人で過ごした日々は、それぞれにとって何よりの宝物だった。

大切だった。大切にしたかった。だから共に生きようと誓い合った。しかし、それらは一人の少女によって粉々に壊される事になる。少女——メシアの手によって。

「どうしてなんだよ、メシア……!!」

今はまだ誰も想像すらしていない残酷な結末は、もうすぐ訪れる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2063y/>

朝焼けが消える前に

2011年11月4日05時21分発行